

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	言語学と現代社会
Author(s)	近松, 明彦
Citation	ニダバ , 26 : 141 - 150
Issue Date	1997-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048022
Right	
Relation	



言語学と現代社会*

近 松 明 彦

0. 序論

現代を特徴づけるキーワードとして、国際化、情報化という言葉が用いられるようになって既に久しい。一時は流行と言っても過言でない程、耳にする機会が多かったように思う。今もってなお、これらの名称は現代社会を特徴づける上で欠かすことができない。

言語学はこのような社会の状況とどのように関係しているのだろうか。社会科学や認知科学においては、理論のリアリティーが時代と社会の文脈に強く依存するという趣旨のことがしばしば指摘されている（佐和(1982)、佐伯(1986)等、参照）。言語学は、社会科学や認知科学の関連分野として言及される場合が多い。言語理論のリアリティーも、やはり社会的、時代的文脈と無関係ではないであろう。そして、上記の通り、国際化と情報化が近年の社会的文脈の中で大きな要素を成しているのなら、言語理論は、国際化、情報化との関連性に相当左右されることになるのではないかと思われる。無論、外発的動機を偏重することには注意すべきであるが、しかしながら、理論と現実の緊張関係を保持することも、また必要と思われる。

以上のようなことから、本稿は、言語学の既存の諸領域、周知の様々な理論的立場が、国際化、情報化など、現代社会において進行中の諸々の動向と、どのような関係にあるかについて俯瞰的記述を行うことを目的とする。尚、本稿末尾の参考文献の欄には啓蒙書や時論を扱った文献が多く列挙されているが、これは、本稿が現代社会との関係をテーマとしているためである。

1. 国際化

国際化は、政治、経済、情報通信など、社会のあらゆる方面で進行している。

第二次世界大戦後の世界経済は、貿易の拡大や、企業の多国籍企業化の進展などによって、国家と国家の間の経済的相互依存関係を増してきたと言う（宮崎(1986:IV)）。そして、現在、「国民経済」からトランスナショナルな経済的枠組みへの移行が進行しているとの見解が示されている（宮崎(1996)）。

このように経済がグローバリゼーションの方向に向かうことになった契機として先ず挙げられるのは、多国籍企業の登場と情報通信革命である（宮崎(1996)など）。現代社会を

特徴づけるキーワードである情報化と国際化は、相互に関連している。例えば、国境を越えて外国に電波が流れるスピルオーバーと呼ばれる現象が発生し、それによって、越境テレビという放送が生じているという(藤竹(1996)など)。また、1994年の改正放送法の成立により、放送の国際化が更に促進されるものと考えられていると聞く(ibid.)。このほか、インターネットの普及等、情報通信の分野の発展が国際化を促す例はますます増えている。

政治の面では、幾分複雑な点を含むが、やはり国際化は進んでいるように見える。例えば、岡部(1995)は、国民国家の基礎であった経済圏と文化情報共同体が乖離してきていると指摘している。即ち、経済圏が拡大しつつある一方で、文化情報共同体は細分化してきているというのである(ibid.)。このように一口に国際化と言ってもやや複雑な様相を呈しているが、従来の国民国家の枠組みに近年変化が見られるようになってきているということは言えよう。

2. 国際研究としての言語学、インターフェイスとしての言語学

国際化は学問分野の枠組みの変化にも影響を及ぼしている。阿部(ed.)(1992:序)は、国際文化という名称を冠した学部、学科が増加している傾向を指摘し、国際文化学という学問分野の内容規定を試みている。それによると、地域研究を基礎としながら、伝統的立場からの批判に対応する形で、比較研究が発達してきた。更に、国際文化学は、このような伝統的な比較研究に比べて、より客観的、価値中立的なものとして特徴づけられている(ibid.)。阿部(ed.)(1992:序)は、このような国際文化学の基礎として、英語教育の重要性を強調している。

これと関連した分野に国際関係論がある。中嶋(1992)によると、国際社会は政治的、経済的、文化的などの諸断面から成り、それらの諸断面が交錯する「場」(即ち、インターフェイス)が国際関係であるとされる。私見では、上で見た国際文化学とは、国際関係における文化的断面に関する研究分野ということになろう。中嶋(1992:2.3)は、この文化的接触の断面を研究するための分野として、国際コミュニケーション論、情報理論、対外イメージ論、国際心理学、政治文化論、文化摩擦研究、比較文化論、アイデンティティ理論などを挙げている。また、地域研究との関連については、両者は相互補完的關係に立ち、地域研究が国際関係論の土台を成すとの立場に立っている(中嶋(1992:3.2.))。そして、その際、比較研究のアプローチが重要になるが、中嶋(1992:3.3)は、その比較の方法論の発達に寄与した分野として、言語学に言及している。また、国際関係論を学ぶための基礎技能については、外国語の習得を挙げている。

ここで、上の議論に依拠しつつ、国際研究と、言語・言語論の関連をまとめてみることにしたい。技能としての外国語の習得が先ず必要となる。これは、**言語教育**と呼ばれる分野であり、更に、その基礎部門としての、**言語獲得論**などの**応用言語学**が関連してくる。また、上で見た中嶋(1992)の指摘の通り、比較言語学が比較方法のモデルを提出する。ここで、**比較言語学**(comparative linguistics)が言語間の歴史的系統関係を解明する分野であ

るのに対し、かかる通時的系統関係と無関係に、共時的に言語間の差異を解明する領域として**対照言語学**(contrastive linguistics)がある(風間(1978:序章))。対照言語学は、言語教育の基礎資料を提出することを目的とする場合が多いが、私見では、これも何等かの形で国際研究に応用できるかもしれない。

ここで、中嶋(1992)が国際関係を国際社会の諸々の断面の交錯する「場」——即ち、インターフェイス——として捉えていたことに注目したい。インターフェイス(インターフェース(interface))とは、「①相異なる装置を接続するための仲介装置。コンピューターと人間との接点。②異なる性質のものを結びつけること。その境界域。」(『情報・知識 imidas』(p.1435))と定義される。坂本百大(1987)などは、現代社会において重要な役割を果たす概念として、このインターフェイスを取り上げており、例えば、倫理を、人と社会のインターフェイスとして重要視している。確かに、輸送技術の進歩は、異なる地域間の交流を促す。通信技術が向上するのに伴い、コミュニケーションは頻繁になる。従来、没交渉であったもの間の、ある種の接触の度合いが、増大するということは、我々が昨今、日常的に体験することである。その意味で、「インターフェイス」が現代社会のキーワードであるという、坂本百大(1987)などの捉え方は、妥当であると言える。

そのような点から見れば、言語についても人間関係の調整技術の一部として位置づける見方が必要になろう。これは、言語理論においては、**語用論**(pragmatics)に該当する。語用論は、一言で定義すれば、「言語表現とその使用者との関係を研究する分野」(荒木・安井(eds.)(1992:1087,r.))である。また、先に言語教育の重要性が指摘されていることを見たが、その方面では、近年、「コミュニケーション、インタラク션을重視した指導法」ということが広く言われるようになってきている。このことも、言語を人間と人間とのインターフェイスとして捉えるようになってきているためという形で理解することができよう。このほか、上で見た比較言語学、対照言語学なども、言語間のインターフェイスを扱う学問として把握することが可能である。ある言語と他の言語の異同を解明することで、それらの言語の相互関係を明確化し、両者がある意味で媒介するのである。

このように、国際研究としての言語学(linguistics as international studies)は、特に**インターフェイスとしての言語学**という性質を強めてゆくのではないかと思われる。

3. 文化接触と言語接触

インターフェースとしての言語学という観点には、特に、文化接触、言語接触など、国際化から結果する諸々の現象にも当てはまる。

国際化は、文化接触を伴い、一方の文化が他方の文化に統合されるなど、文化の変容をもたらすことになる(山中(1992))。一例を挙げれば、日本では、基層信仰としての神祇信仰と、普遍宗教としての性質を持つ外来の仏教との習合現象などに文化の統合の実例を見ることが出来よう(義江(1996)等)。

一方、言語に目を転じるならば、言語接触が同様に言語の融合を引き起こすことが知ら

れている。即ち、**ピジン**、**クレオール**である（例えば、Trudgill(1974/1983:Ch.8)等）。申すまでもなく、ピジン、クレオールは、複数の言語が融合的、収束的に一つの言語を生じたものであり、言語間のインターフェイスが独立して顕在化したものと見なすことが出来るよう。

このほかにも、**バイリンガリズム**や**2言語併存(diglossia)**などの分析、研究も言語接触の問題を扱う上で、無視し得ないであろう。

4. 情報化

次に、国際化から情報化へ話題を移すことにしよう。宮崎(1986:I.7)は、「いま先進工業国でいっせいに進行中である政府規制の緩和（デ・レギュレーション）も、金融の自由化、多国籍企業の発展の促進、そのための国際通信衛星を駆使した情報の世界的ネットワークの形成を企図するものにほかならない。」と述べている。既に、冒頭の国際化との関連で見たとおり、国際化と情報化は相互に密接に関連している。

情報化が言われるようになって久しい。そして、特に、1990年代においては、マルチメディア(multimedia)への期待が大きい。マルチメディアは、「複数のモード（言語、音像、映像）がデジタル技術によって、メディアとしてのコンピュータに融合されること」（妹尾(1996)）と定義される。従来のパソコンが文字中心であったのと比べて、音声、映像等が融合されている点、その融合が「デジタル」によるという点に特徴があるようである。ここで、音声、映像などのモードは、文字、言語情報と比べて、感性的だという点に注意したい。マルチメディアは、一般に、感性と関わる技術として特徴づけられている（西垣(1994:Ch.1)など）。

このように、マルチメディアによって、言語情報と音声、映像との融合が進んでくると、言語研究の方でも、これに対応して、言語的情報と他の感性的な非言語的情報との関連性を射程に入れる必要が高まってくるという面があるのではないかと思われる。このことは、換言すれば、言語的情報と非言語系情報の間のインターフェイスについての考察が重要性を増すということである。

5. インターフェイスとしての記号学

上で見た、言語的情報と非言語的情報の間のインターフェイスとしては、私見では、記号学、記号論の考え方が有効なのではないかと思われる。Saussure(1916)は、「社会生活のさなかにおける記号の生を研究するような科学（小林訳による）」という形で、記号学(sémiologie)の構想を述べている。記号に関するこの包括的な理論には、無論、言語学が含まれるだけでなく、その他多様な非言語的記号がこの分野の考察対象になる。この意味で、狭義の言語情報と、それ以外の情報を記号論的に総合し得るのではないかと思われる。ここで、言語情報と非言語系情報のインターフェイスと言った場合、二つの側面があると考えられる。即ち、一方は「言語の非言語化」であり、もう一方は「非言語の言語化」である。

「言語の非言語化」とは、換言すれば、言語の非言語的・感性的側面の考察である。言

語の感性的な側面についての研究としては、古くから詩学が知られている。特に、Jakobsonの「言語学と詩学」(“Closing statement: linguistics and poetics”)¹¹⁾などのように記号学的な観点に立った詩学などは、言語の感性的側面を分析している例と見ることができる。

「非言語の言語化」とは、言語以外のものを言語に見立てて論ずることである。これについては、建築や街並みの分析に記号学、言語学的分析法を応用するなどの例が知られている。例えば、友田博通は、エッセーの中で、「何でも言語記号に置き換えていけばわかりやすく物事を説明でき、さらに未知の建築形態も発見できると思った」(友田(1996))と述べている。また、門内(1991)は、M.A.K. Hallidayの機能主義言語学の影響下にある社会記号論(social semiotics)の立場から、街並みの分析例を紹介している。この場合には、街並みはテキストとして把握され、その情景は「意味システム」、「形態システム」、「素材システム」からなる多層構造としてモデル化されている。街並みとは本来視覚情報であるが、ここでは言語に準じた扱いを受けている。

以上のように、言語と言語以外のものを記号として包括する記号学には、言語情報と感性的情報の交錯するマルチメディア時代の状況と平行する側面が見出されるのではないかと思われる。

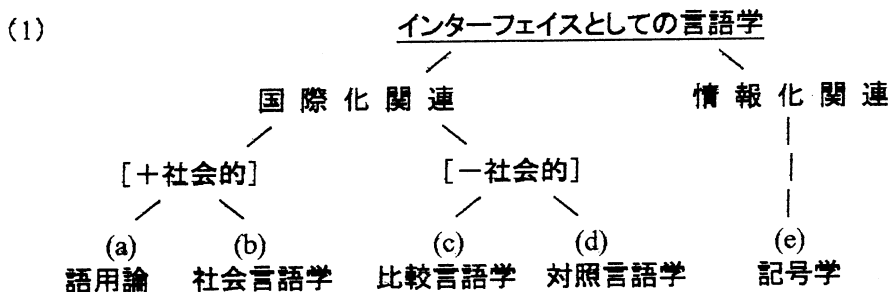
6. 国際化および情報化から見た言語論

以上をまとめると、2節の終わり近くで述べたとおり、現代社会においては、「インターフェイスとしての言語学」が重要性を増すと言えそうである。

国際化に関して、インターフェイスと言った場合、言語間のインターフェイスと人間同志のインターフェイスという2つの側面がある。従って、このような研究の路線は、言語間の比較・対照を一つの柱とし、他方で、語用論、言語接触の研究など、広い意味での社会言語学を、もう一つの柱とすることになろう。

また、情報化に関してインターフェイスと言った場合、言語情報と非言語情報のインターフェイスが重要なポイントになる。そして、具体的には、記号学的な研究がこれに当たるのではないかと思われる。

このことを図示すると、次のようになる¹²⁾：



唯、このことは、国際研究及び情報化との関連において言えることであり、申すまでもな

いことであるが、言語の伝統的な捉え方そのものまで変化すると言っているわけではない。

7. 生成文法と現代社会

7.1. 学際研究と自律言語学

上の(1)の(a)-(e)に挙げられた研究分野は、いずれも、学際的分野である。これは、本稿が、実社会と言語学の接点に焦点を当てたことから出てきた自然な結果であると言える。実際的な複雑な問題の解決に当たっては、複数の研究領域の共同作業が必要を増すものである。

ここで、(1)のように、学際的研究に焦点を当てることになるならば、その一方で、言語学プロパーの研究分野はどのようになるのであろうか。言語学プロパーの分野とは、言語の自律性(autonomy)に注目した立場、自律言語学との関係である⁹⁾。ここでは自律言語学の一つのケースとして、本稿では、生成文法(generative grammar)を取り上げてみたい。生成文法は、自律言語学の代表的な理論とされるのが常である。また、20世紀後半の言語理論の中で、色々な意味で、最も影響力の強い理論と言ってもさしつかえないであろう。

7.2. 国際化における普遍と特殊

はじめに、(1c-d)に記した比較言語学と対照言語学に関連して、言語間の比較・対照について論じておくことにしよう。

普遍文法(universal grammar, UG)は、「自然言語の持つ一般的な構造上の諸性質を規定する理論」(荒木・安井(eds.)(1992:p.1534r))とされるが、生成文法においては、言語獲得を説明する上で、この普遍文法が幼児に生得的に与えられていると一般に仮定している(ibid.)。言語の普遍性はこれで理解できるであろうが、では、言語間の個別的差異はどのように考えるべきであろうか。この点について、生成文法、特に、Chomsky(1981)等に代表される、原理と媒介変項のアプローチ(principles and parameters approach)では、普遍文法が媒介変項(parameter)を含んだ多くの原理から成る体系であると考えている(大津(1990:3.2.)など)。そして、生後の経験と合致するような仕方で、その媒介変項の値を固定してゆくものと仮定される(ibid.)。これは、あたかもスイッチの切り替えに譬えられるかも知れない。言語間の文法的差異は、このような媒介変項の値がどのような値に固定されるかによって、生じてくると考えているのである(一例を挙げれば、長谷川信子(1990:1)など)⁹⁾。

このように、生成文法では、媒介変項値の固定という観点から言語間の比較対照を試みる。そういった研究は、一般に、比較統語論(comparative syntax)などと呼ばれることが多い⁹⁾。生成文法は、普遍文法と媒介変項上の差異という2つの概念の補完作用により、言語における普遍と特殊の問題に対応しようとしているのだと言える。近年の国際関係において経済圏が拡大する一方、文化情報共同体が細分化してきているという見解(岡部(1995))を第1節で紹介したが、岡部(1995)によると、最近の国際社会において普遍と特殊についての新たな問題が生じているという。この点で、生成文法は、国際化に伴う問題

と平仄を合わせた形で、問題に取り組んでいるようにも思われる。

加えて、このような理論は、国際化に不可欠な外国語教育にも深い関連がある。普遍文法と媒介変項値設定の概念は、上で見たように、言語獲得の仕組みを解明することを目指して定立されたものであった。この考え方を更に推し進めて、第二言語獲得(習得)理論に応用した研究領域がある。これは、普遍文法に基づいた第二言語習得研究(UG-based second language acquisition research)と呼ばれているものである(大津(1994)等参照)。第二言語習得(second language(L2) acquisition, SLA)に関する研究は、言語教育の基礎研究として、近年目立った進歩を遂げている。先に2節で見たとおり、国際文化学や国際関係論の分野での英語教育、外国語習得の重要性は、多くの論者が指摘しているところである。生成理論における普遍文法の考え方は、このように外国語教育の基礎理論の形でも、国際化の進展に関わっているといえることができる。

次に、国際化に関連して、文化接触や言語接触の問題がある。これは、(1b)の社会言語学が関係する分野である。Chomsky が方法論として理想化を採用しているため、言語使用の社会的側面が捨象されているというのが、一般的認識である(柴谷(1982)等)。しかし、生成理論と社会言語学に接点があるわけではない。生成文法における所謂標準理論(standard theory)的な路線とは一線を画するものの、かつて生成意味論(generative semantics)が社会言語学と関係が深かったと言われている(柴谷(1982))。これについては、次節(7.3節)を参照されたい。また、言語接触と言えば、ピジン、クレオールが代表的である。ピジン、クレオールの研究から発している、D. Bickerton のバイオプログラム論などは、無論細部は異なるものの、上で見た、Chomsky の生得説(innate schema)から少なからぬ影響を受けているように見える(寛(1985)参照)。即ち、第一世代の用いるピジンが、第二世代ではクレオールに変換するが、その際、第二世代の子供は「どのような言語モデルも必要としなかった」(寛(1985))ということになる。このことから言語能力が人間にバイオプログラムされていると見るのである(ibid.)。

7.3. ディスクール論的転回と生成文法

次に、情報化と生成文法の関連に話を移したい。このことに直接関係するのは、(1e)の記号論であるが、加えて、(1a-b)の語用論、社会言語学も実は関係がある。

情報化の進む近年、それと呼応するかのように、現代の言語論の分野でメディアロジー的転回ということが言われるようになってきている(石田(1996)等)。このメディアロジー的転回との関連で、石田(1996)は、<1969年>という年を、<ディスクール論的転回>の年と呼んでいる。この年、フランスの構造主義者、Émile Benveniste が「ラングの記号学」の終焉を論じ、この時期以降、語用論等が発展を遂げるようになったとのだと言う(石田(1969))。

生成理論の影響の強い北米の学界において、このような流れと平行しているのは、生成意味論である。前節でも触れた生成意味論は、よく知られているように、所謂標準理論的な流れ(Chomsky(1965)等)から分岐して別の路線に進んだ主な立場の一つである。安井

(ed.)(1975: *generative semantics*))によると、生成意味論のモデルが特に強く主張されるようになったのは、1969年頃からであると言う。ディスクール論的転回の年である。生成意味論は、社会言語学と関連が深く（女性語の研究など）、また、文とコンテクストの関係に注目するなどの特色がある（柴谷(1982)等）。生成意味論は発話行為に関する研究（つまり、語用論と重なる研究）なども行った(ibid.)。このように(1a-b)の部分に相当する研究が、生成意味論によって行われたことになる。しかし、1970年代中頃までには、生成文法は構造的側面の解明に専念し始め、状況と文の解釈等の間の関係は、語用論の問題として扱われるようになったと言う(Newmeyer(1992:4.2.2.))。

しかしながら、これで生成文法におけるディスクール論的な流れが、消滅したというわけではない。ディスクールは、申すまでもなく、日本語では談話(discourse)と呼ばれる。談話文法が、文を超えて文法現象を考察するのに対し、生成文法が扱うのは、主として文÷文法であろう。しかし、談話文法と文一文法に接点が無いわけではなく、井上(1983)は、そのような事例として、「は」と「が」の問題を取り上げている。生成文法の分野では、1980年代、原理と媒介変項のアプローチ(Chomsky(1981)等)が発展を遂げる。Williams(1977)は、それへ向けた時期の研究であるが、動詞句の削除という談話論的性質の強い現象を扱っている。

談話文法は、理論的には機能主義(functionalism)の立場に立つというのが、一般的認識であろう。生成理論と機能主義を連携させようとする立場は、現在もしばしば提唱されている。上で見てきたとおり、近年、言語の伝達的な側面が強調されているが、生成文法と機能文法の総合(synthesis)は、理論言語学に課せられた最も肝要な課題の一つであると言えるかもしれない。

メディアロジー的転回(石田(1996)等)ということが言われる現在、生成文法とその関連領域がどのような方向に発展するか、注目してゆきたいと思う。

8. 結語

以上、現代社会の主な動向から、言語研究における幾つかの学際的な分野をクローズアップしてきた。その上で、言語学プロパーの分野の一つの代表的例として生成文法を取り上げ、先の主要学際分野との関連を見た。言語学が学際分野との交流を深め、これが、言語学の内発的發展に加わることで、言語学の進展、及び、その社会的貢献に、一層の相乗効果が上がることを期待したいと思う。

注

* *Linguistics and modern society.* (Akihiko Chikamatsu) お世話になった多くの方々に感謝申し上げます。

1) Jakobson(1963)に収録。

2) 本文(1)の図で、語用論(国際化関連、[+社会的])は、通常、記号学(情報化関連)の下位の一部門とされている。また、対照言語学(国際化関連[-社会的])においても、語用論的な要素や、社会言語学的な要素が関わっている現象を扱う場合が出てこよう。その意味で、(1)は、暫定的、便宜的と言えるかもしれない。

3) Newmeyer(1986)は、「自律言語学」の研究者集団について「さらに第三のグループとして、自然科学者が物理現象を研究するのと同様に、つまり言語の特質のうちで、個別言語の個々の話者がいざ信念や価値観とも、またその言語が話されている社会の性質とも無関係に存在する特質に的を絞って、言語研究をおこなう人たちがいる(馬場、仁科訳による)」と述べている。

4) 生成文法家の一般的見解として、言語間の差異には、媒介変項値の違いに加えて、辞書情報(語彙的情報)の差からも生じると考えられている(例えば、長谷川信子(1990: 1)など)。

5) 2節の太字の比較言語学、対照言語学に関する箇所と関連することであるが、生成文法における比較統語論は、歴史言語学における比較文法とは異なり、共時態の分析であるという点で、従来の対照言語学と共通している。しかし、「対照」が差異に注目する表現であるのに対し、「比較」には共通性を含む語感があるという指摘もある。普遍文法の解明という形で、言語間の共通点に力点を置くという点で、生成文法における比較統語論は、歴史言語学における比較文法なども類似点がある。例えば、歴史言語学において、印欧語比較文法は、印欧共通基語(Proto-Indo-European)の解明という形で、言語間の共通点にやはり重点を置いていた。

6) 上の注2)を参照のこと。

7) 本稿は、国際化、情報化に議論的を絞ったが、今後の社会を特徴づけるもう一つの傾向に高齢化が挙げられよう。これは、主に、福祉、医療関係の分野に属することである。言語研究で、医療等の分野と関連した領域と思われるものに、神経言語学がある。「失語症」研究などは、認知科学と関係が深く(坂本勉(1996)等)、生成文法とも無関係ではない(チョムスキーにおける「言語は臓器である」という言語観(鬼界(1994))を想起されたい)。

参考文献

- 阿部美哉(ed.)(1992). 『国際文化学と英語教育』, 東京, 玉川大学出版部.
- 荒木一雄、安井稔(eds.)(1992). 『現代英文法辞典』, 東京, 三省堂.
- (Chomsky, Noam(1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass., MIT Press.
- _____(1981). *Lectures on government and binding*, Dordrecht, Holland: Foris.
- _____(1995). *The Minimalist Program*, Cambridge, Mass., MIT Press.
- 藤竹暁(1996). 「マスメディア」, 『情報・知識 imidas』1996, pp.485-493, 東京, 集英社.
- 長谷川信子(1990). 「原理とパラメータのアプローチにおける受動構文」, In 日本認知科学会(eds.)(1990), pp.89-107.
- 井上和子(1983). 「文—文法と談話文法の接点」, 『言語研究』, 第84号, pp.17-44.
- 石田英敬(1996). 「『メディアロジーの転回』の条件: 言語科学とメディア」, 『現代思想』(1996年4月号), Vol.24, No.4, pp.76-85.
- Jakobson, Roman(1963). *Essays de linguistique générale*, Paris, Minuit. [川本茂雄(監修), 山村すゞ子, 村崎恭子, 長嶋善郎, 中野直子(訳)(1973). 『一般言語学』, 東京, みすず書房.]
- 笈壽雄(1985). 「バイオプログラム論—『生物学的実在』としての言語能力の探究」, 『言語』(1985年6月号), Vol.14, No.6, pp.74-78.
- 風間喜代三(1978). 『言語学の誕生』(岩波新書), 東京, 岩波書店.

- 鬼界彰夫(1994). 「チョムスキー：言語は臓器(オガク)である」, 『言語』 (1994年10月号), Vol. 23, No.10, pp.73-81.
- 宮崎義一(1986). 『世界経済をどう見るか』 (岩波新書), 東京, 岩波書店.
- (1996). 「トランスナショナルな枠組みに移行する日本経済」, 『エコノミスト』 (1996年1月9日号), Vol.74, No.1, pp.54-63, 東京他, 毎日新聞社.
- 門内輝行(1991). 「記号学からみたハリデー — 言語から非言語へ」, 『言語』 (1991年4月号), Vol. 20, No.4, pp.56-62.
- 中嶋嶺雄(1992). 『国際関係論』 (中公新書), 東京, 中央公論社.
- Newmeyer, Frederick J. (1986). *The politics of linguistics*, Chicago, Chicago University Press. [馬場彰, 仁科弘之(訳) (1994), 『抗争する言語学』, 東京, 岩波書店.]
- (1992). "Iconicity and generative grammar," *Language*, Vol.68, No.4, pp.756-796.
- 日本認知科学会(eds.)(1990). 『認知科学の発展』 第2巻, 東京, 講談社.
- 西垣通(1994). 『マルチメディア』 (岩波新書), 東京, 岩波書店.
- 大津由紀雄(1990). 「文法獲得関数の性質について」, In 日本認知科学会(eds.)(1990), pp.109-136.
- (1994). 「統語の習得」, 小池生夫(監修), SLA研究会(eds.), 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』, 東京, 大修館, pp.89-107(Ch.5).
- 岡部達味(1995). 「世紀末国際社会をどう見るか — 変貌する国民国家体系をめぐる」, 『外交フォーラム』 (1995年5月号), 通巻80号, pp.10-19.
- 佐伯胖(1986). 『認知科学の方法』 (認知科学選書10), 東京, 東京大学出版会.
- 坂本百大(1987). 「インターフェイスの記号論」, 日本記号学会(eds.), 『文化のインターフェイス』 (記号学研究7), pp.13-25.
- 坂本勉(1996). 「『ことば』と『こころ』の仕組み：言語のモジュール性をめぐって」, 『三田評論』 (1996年7月号), Vol.13, No.3, 通巻982号, pp.18-22.
- Saussure, Ferdinand de(1916). *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Lausanne et Paris, Payot. [小林英夫(訳)(1972). 『一般言語学講義』 (改訂版), 東京, 岩波書店.]
- 佐和隆光(1982). 『経済学とは何だろうか』 (岩波新書), 東京, 岩波書店.
- 妹尾壁一郎(1996). 「『写真』から『映像』へ — デジタル・イメージング時代の『写真』『写真家』『写真産業』 —」, 『三田評論』 (1996年8・9月号), 通巻983号, pp.20-31.
- 柴谷方良(1982). 「社会言語学と変形文法」, 『言語』 (1982年10月号), Vol.11, No.10, 24-31.
- 友田博通(1996). 「ソーシャルと建築」, 『言語』 (1996年4月号), Vol. 25, No.4, pp.6-7.
- Trudgill, Peter(1974/1983). *Sociolinguistics: An introduction to language and society*, Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middlesex, England. [土田滋(訳) (1985). 『言語と社会』 (岩波新書), 東京, 岩波書店.]
- Williams, Edwin(1977). "Discourse and logical form," *Linguistic Inquiry*, Vol.8, No.1, pp.101-139.
- 山中弘(1992). 「国際文化と文化接触」, 阿部(ed.)(1992), pp.31-45.
- 安井稔(ed.)(1975). 『新言語学辞典 改訂増補版』, 東京, 研究社.
- 義江彰夫(1996). 『神仏習合』 (岩波新書), 東京, 岩波書店.

『知識・情報 imidas』 1996, 東京, 集英社, 1996.

(著者名、アルファベット順)